

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第589号 平成25年8月6日

10年1剣を磨く

7月30日、北広島河川防災センターを会場に、北海道警察主催による「災害警備訓練」が行われ、私は公安委員としてその訓練を視察して来ました。

訓練は、道警を主体に、陸上自衛隊、北広島市消防本部等の参加の下、災害時における警備や住民の避難誘導、被災者の救出や鑑識、機動通信等を内容とするもので、参加者が臨場感を持って取り組んでいたのが印象的でした。また、若い警察官らのきびきびとした動きを見ていると、大変頼もしく感じたところです。

この訓練を視察しながら、私は、唐の詩人「賈島」の

10年、1剣を磨く
霜刃、未だ曾(かつ)て試みず
今日把(と)りて君に似(しめ)す
誰か不平の事有りや

という詩を思い出しました。

この「10年1剣を磨く」という詩は、川中島戦を描いた頼山陽の「不識庵（上杉謙信）、機山（武田信玄）を撃つ の 図 に 題 す」という詩の基になった事で有名です。

私は、この詩を次のように理解しています。

「時節は到来するのか、来るとすればそれは何時なのか分からないが、ひたすらその日の為に修練を積んで来た。その腕前は、霜の様に光る刃の様に鋭いが、その切れ味はまだ試した事はない。これまで、周りの人々からは、無駄な努力をと諷られたが、今君にこの腕前を見せよう。さすれば、一体誰が私に向かって不平をいうだろうか。」

「賈島」という一人の剣豪は、果たして刀を抜いたのかどうか、そういう機会があったのかどうかは分かりませんが、彼には、何時でもその準備が整っていた事は確かです。

防災訓練も、これに等しいと思います。華やかな事もなく、また、周りから注目される様な事がなくとも、来る日に備えひたすら自分の技量を磨く、これこそが訓練というべきものです。

さて、今年は、北海道南西沖地震から20年という節目の年に当たります。

1993年7月12日午後10時17分に発生した地震は、マグニチュード7.

8、僅か2から3分で高さ30メートルに及び津波が襲い、死者・行方不明者は230人を数え、住宅も1400棟が被害を受けています。被害総額は664億円に及び、「島は終わりだ」と感じた人も少なくありませんでした。

当時高校生で、今は町の消防職員となっている三浦さんは、「地震があったら、1人でも高台に逃げろ」という祖父母の言葉を思い出し、足の悪い祖父を背負い、祖母の手を引いて無我夢中で逃げ、間一髪で助かったといいます。この様に、津波に対する知識の有無が生死を分けた場面は、随所にあった筈です。

しかし、東日本大震災の悲惨な状況を見ると、南西沖地震の教訓から学び、十分対策を講じて来たとは、残念ながらいえません。国も東京電力も、津波の威力を軽視し、取るべき対策を怠っていた事は確かですし、石巻市立大川小学校では、避難が遅れた為に7割の児童が亡くなるという惨事となりました。

一方、釜石市の小中学校では、普段から大津波を想定した避難訓練行っていた事が奏功し、津波来襲時に学校管理下にあった子ども達は全員無事でした。

東日本大震災は、自然の力の凄まじさを我々に見せ付けると共に、改めて、平素からの訓練が如何に重要であるかを再認識させてくれました。

災害はいつ来るか、誰にも予測は出来ません。しかし、日本は地震を初めとする災害大国です。

「災害は、忘れた頃にやってくる。」という言葉がありますが、これはいい換えると、災害の記憶を風化させてはいけないという事です。その為には、常に、臨場感のある訓練を、愚直に続けるしかありません。

ところで、10年1剣を磨いて刀を抜いたのは上杉謙信でした。しかし彼は、またとない絶好の機会を逃し、遂に武田信玄を捉える事は出来ませんでした。

鞭声粛粛 夜 河を過る
暁に見る千兵の大牙（軍旗）を擁するを
遺恨なり10年1剣を磨き
流星光底 長蛇（大蛇）を逸す
（頼山陽作）

如何に、鍛錬に鍛錬を重ね、1剣を磨いたとしても、これで十分という事も、これで確実という事もない。その事を、我々は肝に銘じて置かなければなりません。

（塾頭：吉田 洋一）